

れるにいたった。

なお、昭和44年(1969)3月刊の『平田市誌』には、市内にある遺跡の概要をのせ、出雲平野北東部の開発について論述している。国富地区の古墳については、昭和49年(1974)7月に島根大学考古学研究会が分布調査と実測を行ない、『菅田考古』14号(昭和51年3月刊)に記録を掲載している。

出西丸子古墳の調査

昭和27年8月には、山本清・美多実・池田満雄らによって斐川町の出西丸子古墳の調査が行われた。切石を用いた石棺式石室系統の横穴式石室で、特色ある閉塞構造が明らかにされている。玄室閉塞用の切石前面に卍字形のかんぬき状陽刻を施しているが、同様のものは八束郡吉道町白石の伊賀見古墳、下の空古墳、東来寺の鏡北道古墳、松江市浜佐陀町北小原横穴群2号穴に認められており、この地域の風習をうかがわせる。

なお、昭和47年(1972)に刊行された『斐川町史』には、池田満雄が町内にある遺跡の概要を紹介し、律令制時代における「出雲都」の「出雲郷」や「建部郷」などの社会構成についても論述している。

斐伊川の川底に埋もれた遺跡

昭和24年(1949)、斐伊川西岸堤防近くの出雲市大津町石上手に、今市水道会社の新しい水源井戸が掘られた際、地表面下6m前後の深い部分から、古式土師器・木片などが発見された。その後、この地点と200~300mほど離れた位置に、大和物語出雲工場の冷房用水源井戸を掘った際にも、同じ深さの所から後期弥生土器・古式土師器が出土している。昭和31年(1956)8月刊の『古代学研究』14号に、池田満雄は「出雲・石上手遺跡調査概報」を発表している。

さらに昭和37年(1962)になって、国鉄山陰本線の斐伊川鉄橋かけかえ工事で、新橋脚設置のために掘り下げた坑からも、7m前後の深い部分で同様な土器類が発見されている。幾重にも重なる砂層・粘土層などの状況は、斐伊川のはげしい動きを示しているが、出土遺物は長い人間生活の蓄みを教えてくれる。

神門寺境内廃寺跡など

出雲平野における古瓦出土地として、出雲市の鹽冶町神門寺境内、上塙治町長者原、平田市西郷町の西郷郡が知られ、礎石も確認された。これらを『出雲國風土記』にのせる新造院に推定する見解も発表されている。梅原末治は『史述と美術』第22編の8(昭和27年10月刊)所収の「古瓦についての一、二の覚書」で、神門寺出土の特殊な軒丸瓦(水切り瓦)を紹介し、山陽方面との交渉について論じている。また、山本清は『出雲國風土記の研究』(昭和28年7月刊)所収の「遺跡の示す古代出雲の様相」で、出雲の初期寺院跡について総括的に記述している。

矢野遺跡の調査

出雲市矢野遺跡(貝塚)は、原山遺跡に統いて注目されるにいたったが、昭和28年(1953)

8月、島根考古学会によって試掘調査が実施された。弥生前期・中期・後期から古墳時代にわたる各種土器、石器類、魚貝類、獸骨などが出土し、出雲平野中央部での生活ぶりがわかるようになった。その後、昭和47～48年に西尾克己らによって弥生後期の墓域とみられるものなどが調査されている。

矢野遺跡の周辺、矢野・大塚・小山一帯には、弥生土器・土師器・須恵器の散布地が広範囲にわたって存在し、四絆小学校敷地のように後期弥生土器・古式土師器が相当まとまって出土した遺跡もある。『出雲國風土記』に記す「八野郷」は、このあたりをふくんでいたとみられるが、弥生時代からの集落・地形の変遷については、十分に調査研究がされていない。

菱根遺跡と出雲大社神域の遺跡

大社町菱根遺跡は、昭和29年7月に酒詔仲男ら同志社大学調査隊によって発掘調査され、早期水～前期初頭の縄文土器や石器類、獸骨・植物遺物などが出土した。出雲平野周辺に縄文時代遺跡が確認されたことは、研究史上特記すべきことである。

昭和30年(1955)には、出雲大社神域で防火用水道管埋設工事の際、縄文・弥生から歴史時代にいたる各種土器が出土し、大園一雄により調査記録されている。また、昭和43年(1968)には、拝殿地下室増設工事で数個の後・晩期縄文土器片が採集されている。

大井谷横穴群の研究

門脇俊彦は『私たちの考古学』8号(昭和31年3月刊)に「出雲国大井谷横穴群」を発表した。出雲平野南部の横穴群についての実態を総体的に把握し、その社会的背景をさぐろうとした力作である。

出雲市誌と出雲市の文化財

第2次大戦後、出雲平野における考古学調査研究の成果を集約したものとして、昭和26年(1951)11月刊行の『出雲市誌』所収の「古墳」(山本清担当)がある。市内各古墳の構造や、上塙治篠山古墳・大念寺古墳・放れ山古墳などの出土遺物が図示されており、注目すべき業績であった。

昭和31年4月には『出雲市の文化財』第1集が発行され、「考古資料」「史跡」(池田満雄担当)の項につぎのものが報告されている。

(考古資料) ①欠野貝塚出土品 ②四絆小学校付近出土土器 ③下木原西谷丘陵出土土器 ④大津石土手水源地出土土器 ⑤天神町県立農事試験場付近出土土器 ⑥上塙治方面出土石器類 ⑦大念寺古墳出土品 ⑧上塙治篠山古墳出土品 ⑨放れ山古墳出土品 ⑩鶴の沢消滅横穴出土土器 ⑪神門寺境内出土瓦 ⑫長者原廃寺址出土品

(史跡) ①矢野貝塚 ②大念寺古墳 ③今市塚山古墳 ④上塙治篠山古墳 ⑤地蔵山古墳 ⑥上塙治地区の横穴群 ⑦大槻古墳 ⑧放れ山古墳 ⑨井上地区の横穴 ⑩光明寺古墳 ⑪小坂古墳 ⑫刈山古墳群 ⑬上木原の横穴群 ⑭宇那手塚山古墳 ⑮大塚古墳 ⑯大寺古墳 ⑰神門寺境内廃寺址 ⑱長者原廃寺址

統いて、昭和35年（1960）12月に『出雲市の文化財』第2集が刊行され、つぎの事項が報告されている。

- （考古資料） ①多聞院貝塚及び周辺遺跡出土品 ②福知寺山横穴群出土品
（史跡） ①多聞院貝塚 ②宝塚古墳 ③妙蓮寺山古墳 ④福知寺山横穴群 ⑤地蔵堂横穴群 ⑥深田谷横穴（駄門のある横穴）

知井宮多聞院遺跡の発掘調査

出雲市知井宮町の多聞院遺跡（貝塚）は、前述のように早くから注意されていたが、第2次大戦後に大社考古学会によって調査され、『貝塚』30号（昭和25年12月）に「多聞院貝塚の発掘」という概報が公表されている。

昭和33年（1958）11～12月、明治大学考古学研究室によって発掘調査が実施され、その成果は『考古学集刊』第2巻第1号（昭和38年6月）に大塚初重「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」として発表されている。ここで知井宮I式・II式・III式・IV式という4つの型式をあげ、山陰地方における弥生時代中期後半以降、古墳時代前期にいたる土器編年を提示している点が注目される。

妙蓮寺山古墳の調査

出雲市下古志町の妙蓮寺山古墳は、昭和33年秋に出雲高校社会部によって横穴式石室の調査が行われ、統いて昭和38年8月に県教育委員会と出雲市教育委員会の共催で発掘調査を実施した。その成果は、昭和39年3月に『妙蓮寺山古墳調査報告』（島根県教育委員会）として刊行されている。

横穴式石室の構造や、馬具類をはじめとする副葬品の解説が行われ、出雲平野の後期古墳研究に新しい資料を加えることになった。なお、この調査に際して、県内各地から多くの研究者が集って、共同活動を進めたことも特記しておきたい。

藏骨器の調査

『出雲市の文化財』第1集に、出雲市馬木町小坂古墳の石室内に収蔵された石櫃について報告し、早い時期の大葬例を紹介したが、昭和33年（1958）5月には上塙治の菅沢古墓（石櫃）が発掘調査された。その後、出雲市朝山町の朝山神社付近の山腹でも石櫃が発見されている。

いっぽう、昭和37年（1962）10月に、大津町来原の西谷丘陵から須賀賀古墳（石櫃）が出土し、『島根県埋蔵文化財調査報告書』第5集（昭和46年3月刊）に調査概報を公表している。

昭和40年（1965）3月には、出雲市萩原町において青磁碗2・青磁皿1を伴う藏骨器（常滑焼の大甕）が発見された。『考古学雑誌』54巻3号（昭和44年1月刊）に近藤正は調査記録をまとめた「出雲・萩原発見の骨蔵器」を発表し、土豪佐々木氏との関係について論述している。

西谷丘陵の遺跡群

宍伊川西岸に近い出雲市大津町下來原の西谷丘陵に遺跡の分布することは、昭和31年（1956）4月刊の『出雲市の文化財』第1集（池田満雄「下來原西谷丘陵出土土器」）で紹介した。出土土器中

に吉備地方にみられる特殊器台形土器・特殊壺形土器をふくむことが、前島己基らによって指摘され、広く注目されるにいたった。

昭和47年（1972）3月には、西谷丘陵の北端近くで出雲市教育委員会（発掘調査担当者 門脇俊彦）によって四隅突出型方形墓を含む3基の埴輪群が発掘調査されている。その後、出雲考古学研究会のメンバーが西谷丘陵全体の遺跡群を実測調査して、充実に取り組み、昭和55年（1980）3月に『古代の出雲を考える』2—西谷埴輪群一を刊行するにいたった。

天神遺跡の諸問題

出雲市天神遺跡は、土地区画整理事業による工事中に発見され、昭和47年1月、市教委による緊急調査によって、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかにされた。その後、昭和50年（1975）5月から7月にかけて調査が行われ、第一調査区では弥生時代の土墳墓・溝状遺構、古墳時代の溝状遺構が判明し、第二調査区では柱穴群が認められ、官衙的性格の建物跡と推定された。天神遺跡のあたりを古代における神門郡家に想定する見解も生まれている。

昭和53年（1978）8月、出雲考古学研究会は、天神遺跡の一部を発掘調査して、『天神遺跡の諸問題』（昭和54年8月刊）を発表している。昭和47年の圃場整備工事に際して、下古志町田畠遺跡（弥生中期）が認められているが、こうした低地の遺跡について、適切な対策を講ずる必要がある。



図105 天神遺跡の発掘調査区（『古代の出雲を考える』1より転載）

第5章 神西城と古志城の城主について

今岡 清

神戸川の左岸に広がる低丘陵には、塙治氏とゆかりのある古志城と尼子氏との関りがある神西城があり、古志、神西あたりを領していたことが知られている。

以下にそれぞれの城主について、文献等から述べてみたい。

神西城主

神西氏については不明の点が多い。

島根県史の編者は、神西家の後裔といわれる家を尋ね、相伝文書を見ようと京の裏張りを剥いでまで探したが、神西氏の系譜を知るという目的を達することはできなかったと書いている。

乏しい資料のなにあって神西氏について次のことがみえる。

『雲陽誌』の東神西の項では、

古城 龍山竹生の城という。小野高通より12代在城す。神在三郎左衛門久通尼子の麾下たる
によりて、弘治年中毛利元就のために落城。

八幡宮 此神は鎌倉鶴岡より貞応年中神西の領主小野高通の勧請なり。天正16年宍戸隆家再
建の棟札あり……。

十楽寺 鎮守八幡の祠あり。越山和尚を開山とす。貞応2年小野高通神西を領して龍山竹生之
新城を築居住し給うとき、鎌倉より本尊を求め来て、明年8月朔日梵字を建立して……と
ある。

『神西村誌』に登載されている八幡宮占証文によると、

小野高通波加佐村へ御入郎年者

貞応二癸未也

とある。

出雲市東神西町十楽寺の墓地に神西家の墓がある。いまは総廟になっているが以前には、次のように1列に並べられていた。

高通 時景 元通 景通 貞景 惟通

為通 廣通 達通 久通 国通 清通

この順のうち、時景を景通の次に、清通を貞景の次へおくと、元禄10年（1697）に武田和泉守が編纂した「八幡大神古証文」と一致するという。

以上のことから貞応2年（1223）に小野高通が、新補地頭として鎌倉から東神西に下向し、竹生城を築き神西氏を称したともいわれる。以後12代続いたが、12代神西三郎左衛門は天正6年（1578）播磨土月城にて尼子勝久らと自刃し果てた。

神西家は承久の乱後から、織田信長が毛利一族を制覇しようとした天正まで350余年も続いたといわれるが、その一族や枝葉がわからないのは尼子氏が台頭するまでは小領主であったと思われる。

明徳4年（1393）に神西三郎六郎（清通丸）は、京極高秀から神門郡朝山郷内神原左京亮跡を加給された。明応8年（1499）に神西越前守は、京極政経から神門郡奉行に補任されたと、出雲市下古志町春日家文書のなかに見える。

天文9年（1540）には、尼子勢の吉田郡山城攻撃戦に神西氏も参戦している。同年尼子詮久（晴久）が同族をはじめ出雲国内の諸将、国衆に奉加を命じたものといわれる「竹生島宝嚴寺造営奉加帳」に神西元通の名は出雲衆の中に、牛尾、古志、十蔵氏らとともにみられる。又「尼子分限帳」によれば、足軽大将神西三郎左衛門は、美作内に4667石を給されている。

天文10年（1541）、尼子経久は84才で能義郡広瀬町富田月山城内に死し、尼子氏の衰運のきざしがみえてきた。やがて、永禄元年（1558）毛利元就は再度石見国に進入はじめた。尼子対毛利軍の大森銀山争奪戦は激烈をきわめたが、尼子方にとって毛利の脅威は大きくなるばかりであった。

出雲・石見の国境近くにある神西城は、石見からの侵入に対して重要な城となってきたので、人的にも城塞施設にも整備が急がれたことであろう。この頃尼子方にとてさらに一大事が起きた。永禄3年（1560）尼子晴久が急死したのである。義久がそのあとを継いだ時は、毛利の大軍は出雲に侵入しようとしていた。

永禄5年（1562）には、尼子十蔵のうち三沢、三刀屋、赤穴、高瀬の各城主らは毛利軍に降ったと考えられるが、神西三郎右衛門は神西城を捨て、松江の白鹿城にたてこもっていた。神西城や古志城では、赤穴や白鹿城であったような攻防戦はなかったと思われる。

富田月山城は永禄9年（1566）ついに開城し、義久は俘囚の身となって安芸に送られたが、神西三郎左衛門は月山開城前に毛利に降っていた。

その後は毛利輝元に信用され、伯耆国末石城主となっていたが、尼子勝久を盟主とする山中幸盛らの尼子再興軍に加わり、八束、能義方面で奮戦するが毛利氏の支配する出雲国を制することはできなかった。

神西三郎左衛門の播磨国上月城麓での最期は、「雲陽軍実記」や「陰徳大平記」に詳しく記述されている。

尼子勝久や神西元通らの死骸が埋られたといわれる場所は、先年現地を訪れたところ上月城麓、竹藪の奥の隅のあたらぬ崖下にあり、2~3基の粗製な石塔がある。現在歩く人もいないようみてうけられる。

古志城主

初代の古志（淨土寺山ともいう）城主は、出雲守護職佐々木（塙治）頼泰の弟義信である。

頼泰は弘安（1278）のはじめ、上塙治に移城し、塙治氏を称したといわれるが、古志義信の築城の時期は明らかでない。

出雲国の佐々木一族は、守護塙治氏を中心に佐々木23家といわれるよう、国内一円に勢力をもっていたので、塙治高貞が應永4年（1341）に死んで守護が山名氏にかわっても、それぞれ地頭としての地位はかわらなかつたと思われる。

なかでも古志氏は、義信の次子宗秀が小山村（出雲市）の地頭三木氏の祖となり、次の貞信は保知石（出雲市）に分家し、宗家四代義綱（三郎左衛門佐渡守）の一女は、園造千家直信の室になつてゐる。その後も古志氏は大社の国造家と姻戚関係が続くが、塙治氏衰亡時には出雲における佐々木一族のうち最高の勢力を保持していたと思われる。

北島家佐々木系図（県史による）

義綱 古志佐渡守 法名了光

出雲国古志郡同国比知新宮隱岐因山田別府美作國綾部郡近江国佐々木庄内伏松名地頭職
之事如先例將軍表詮貞治三年三月廿六日御教書被下

古志三城

古志に築かれた城は俗に古志三城といわれる。初代義信は下古志町淨土寺山に築城した。現在の妙蓮寺の裏山を、①淨土寺山城という。次に古志町新宮の②栗栖山城である。ところが栗栖山の城郭の主郭部は③樅森山という。これで古志三城ということになるが、栗栖と樅森をひとつの山城と見れば、あとの一城はどこであろうか。

明徳4年（1393）三刀屋氏は、山名方の塙治遠江入道父子らを、古志高陣に打破ったと軍忠を京極高誼に申し立てている。この古志高陣とはどこであろうか。

『神門村誌』の編者浜村台次郎は、古志高陣を、古志町新宮谷湯船の天が平と解している。湯船は栗栖山より、さらに高い場所である。

神西氏も地頭として12代を数えるが、古志氏も鎌倉・室町・桃山時代を通じて、義信・宗信・高雅・義綱・氏信・国信・久信・為信・宗信・豊信・重信と12代続いたといわれる。

尼子時代の古志氏については次のようにある。

文明18年（1486）尼子経久は、富田月山城を奪取したが、「雲陽軍実記」は、三沢、三刀屋、赤穴、古志城主らは、ややもすれば経久の命令に従がわず敵対の色であったと記しているように、古志氏らはいわゆる地侍として地位を保ち、守護代らの行動に慄々しく動かなかつたと思われる。

しかし、経久は国内を統一しさらに国外へ勢力をのばした。尼子盛運期における古志氏従軍の

事は『実記』には見えないが、後塙治氏の衰えとともに、古志氏の所領も多くなつたと思われる。

天文9年（1540）「竹生島宝嚴寺造営奉加帳」に、出雲衆の中に古志左京亮殿、十歳殿とあり、富田衆の中に古志六郎左衛門尉がみえるが、この頃には十歳（出雲市所原町要宮山ともいいう）にも築城していたことがわかる。このことは『雲陽誌』にも次のようにみえる。

所原 古累 戸倉山という。城主古志左京進源長信此所……。

馬木 勝定寺 天正5年古志宗信七ヶ村を領して十歳之城に居住せらる。当山を正菊比丘尼に給ふ故に………。

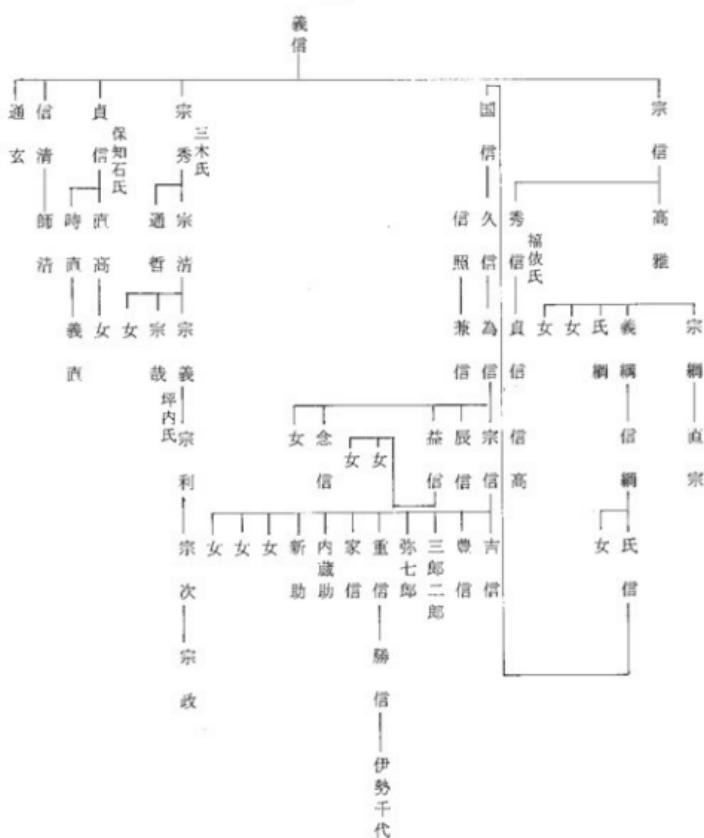
古志氏の末代

古志氏の末代の城主は古志重信である。『実記』によれば永禄元年の大森銀山戦には尼子晴久に従軍しているが、その後毛利の大軍が出雲に進入したときは毛利に降った。やがて富田月山城が開城し出雲は毛利の治下となり、古志郷は熊谷氏が地頭となる。永禄12年、尼子勝久らの尼子再興戦に重信は再び加戦したが、国造家の仲介で又毛利に降り以後は毛利軍に属した。上月城戦には国内の三沢、三刀屋氏らとともに参戦している。その後は吉川元春に従い朝鮮征伐（1591）に出陣しているが、関ヶ原の戦い後、毛利輝元が防長に封ぜられてからの重信の消息はわからぬ。

以上は資料の一部から述べたもので、今後、発掘調査や新資料が発見されればさらに明らかになると考えられる。

出雲佐々木の内古志系図

(北島家藏出雲佐々木吉志之系図より)



後 塩 治 氏 に つ い て

藤 国 大 描

は じ め に

出雲守護に補任された義清流の佐々木氏は、塩治郷に本拠を移してより、在地名を名乗って塩治氏と称し、塩治郷を中心とする斐伊川下流の肥沃な農耕地帯を基礎に、鞏固な地盤を築いたと考えられるが、塩治高貞が室町幕閣において高師直らとの権力闘争に敗れ、足利尊氏の追伐をうけて自刃すると、塩治氏は重大な危機に直面した。塩治惣領職を継いだ弟時綱は、巧みな対応によって在地領主の地位を保持し、以後守護代格の有力国人として存続したが、享禄4年（1531）ごろ尼子経久の圧迫を受けて、塩治の地を退去するの止むなきに至ったと思われ、史上から姿を消すのである。現在塩治の地に遺存する半分城・大井谷城・大迫城などの城跡は、塩治氏の遺した歴史的遺産である。

このように、尼子氏に滅ぼされるまでは中世全期を通じて有力領主として存続した塩治氏も、その関係史料は極めて少なく、従って実態はほとんど知られていない。本稿はわずかに残る断片的史料の中から、塩治氏の歴史的実像を浮かび上がらせるための糸口を見出そうとする試みである。

塩治氏の誕生

塩治氏の名字の地塩治郷は、山陰市塩治町にその名が遺存している。出雲國風土記神門郡の条に記す塩治郷について、加藤義成氏は岸崎時蘿の出雲風土記抄を参照しつつ、塩治北部から今市大津及びその北辺を含む地域とされている。^①

中世の塩治郷はさらに広域となり、日置郷や高岸郷をも組みこんだようである。史料の上で確かめられる限りでも、郷内には大津村・神東村（近世の塩治村）・荻原村・柄島村・園村・荒木村を含んでいたから、現在の山陰市大津町・塩治町・上塩治町・東西の園町・萩町町及び大社町・荒木にわたる広大な地域といえよう。

源平盛衰記には一谷合戦に参加した出雲の平家党として塩治太夫の名が見え、建久5年（1194）^②の出雲國在府官人等解状の裏書には、塩治郷司勝部政光の名が見えるが、彼等は塩治郷に深いかかりがあり、やがては有力な領主武士に成長する可能性をもっていたはずである。しかしそのような経緯からか、鎌倉中期には守護佐々木氏が塩治郷地頭職をもつに至っている。すなわち、文永8年（1271）の杵築大社・三月会頭役結番帳によれば、^③守護佐々木信濃前司泰清は富田庄（99町4反60歩）・塩治郷（101町6反300歩）・美保郷（34町1反180歩）・古志郷（28町6反半）・平浜八幡別宮（27町2反半）など約291町の広大な庄郷地頭職をもっていたことが判明する。かかる地頭職を守護佐々木氏が、いつ、いかなる過程を経て手に入れ

たのか詳かでないが、富田城周辺の富田庄、海上交通の要衝美保関、因衛に隣接した平浜別宮、出雲西部の豪族出雲国造や朝山氏と隣接する塩冶郷・古志郷といった具合に、いずれも政治的経済的に重要な地であるから、守護佐々木氏が意図的に獲得したのかもしれない。

鎌倉時代における出雲国の守護職次第については、佐藤進一氏ら先学の研究があり、最近では④井上寛司氏が研究を進められ、次第に不明部分が解明されてきた。その結果、承久の乱以後、義

出雲国守護職次第（数字は守護の順序を示すもので、①が初代という意味ではない）



清とその子孫が出雲と隱岐の守護職を継承したことは確定的となった。

政義は貞永2年（1233）ごろ出雲隱岐両国守護職を兼帶していることが判明しているので、
義清から政義への継承は、貞永2年をさかのぼること遠からざる時期であろう。政義は幕府近習
であったから、出雲隱岐にはそれぞれ守護代を置いていたが、三浦泰村との反目により、少なくとも延応元年（1239）以前に出家し、守護職は弟の泰清に移ったと考えられている。^⑥

泰清は信濃前司とも称し、弘長元年（1261）ごろまで幕府近習として鎌倉に在勤し、以後は出雲に在園し、弘安5年（1282）長海本庄（松江市本庄村）において頼死した。^⑦泰清が守護として現われる下限は、弘安元年（1278）5月7日付の隱岐前司宛書状であるので、恐らくこの後間もなく守護職を譲ったものと思われる。彼はほぼ40年の長きにわたって守護に在任したが、先にあげた佐々木守護家の所領は、この泰清のときに整備されたものであろう。

泰清の後、守護職は二分され、嫡子時清が隱岐守護、二男頼泰が出雲守護をそれぞれ継承し、義清以来の両守護兼帶は終わりを告げたと考えられている。^⑨もっとも、時清を出雲守護とする説も古くから存在するが、史料上に守護として現われる父泰清の下限が弘安元年5月7日、弟頼泰の上限が弘安元年9月4日であるので、時清の出雲守護であった可能性はほとんどない。ただ、泰清が故嫡子時清に小国隱岐を与え、二男に大國出雲を与えたのか、今後考察する必要がある。

守護職が分離すると、頼泰は塩治に居住し、塩治氏を称したと思われる。そのことを証する決定的史料はないが、(1)尊卑分脈には頼泰の側注に「塩谷」とあり、子貞清の注に「号塩治判官」とある。(2)太平記には高貞を塩治判官としている。(3)三木氏系図頼泰の項に「号塩治」とある。(4)忌部惣社神宮寺根元錄に「雲州守護塩治頼泰歟」とある。(5)弘安元年頼泰は出雲大社へ塩治郷内大津村一町を寄進している。⁽¹²⁾ことなどを総合すれば、頼泰が塩治郷に居て塩治氏を称するようになったと考えて誤りないであろう。頼泰以前の守護の本拠がもともと塩治郷にあったものか、それとも国府近辺又は富田城にあったのを、守護分離を契機として塩治郷に移したものか、史料的に明らかにすることはできない。また頼泰の拠った場所について、出雲私史には「上塩治に城跡あり、大廻といふ、頼泰居りし所は蓋し是ならんか」と記しているが、これも明確な根拠を示してはいない。

それはともあれ、塩治氏は頼泰に始まるのである。頼泰の後、貞清を経て高貞に至る。高貞は元弘期から南北朝初期の激動を巧みな対応によって勢力を拡大し、創立期の足利幕府にあって権要の地位を占めるが、執事高師直との対立から尊氏の追討をうけ、自刃した。

後 塩 治 氏

暦応4年（1341）4月、塩治高貞が出雲宍道郷で自害すると、塩治惣領職は弟の時綱に移ったと考えられる。時綱の系統を一般に後塩治氏という。

高貞の帯していた出雲守護職は、山名時氏・佐々木高氏（道誉）・山名時氏・佐々木高氏・佐々木高秀・山名満幸と移り、明徳の乱後、京極高詮が補任されてからは、京極氏の領国支配が続くことになる。

高貞の失脚後も、塩治氏の勢力は急速に失墜することなく、佐々木・山名の目まぐるしい守護職交替の中で、巧みに遊泳して有力国人としての地位を保持したようである。彼らは鎌倉期と同じように塩治郷に本拠をもち、国人領主制を展開していくと思われるが、残念なことは、中世後期の塩治氏関係史料はきわめて少なく、かつ断片的である上に、現存する数種の系図も異同が多く、その実態を明らかにすることは困難である。

そこでとりあえず、管見の限りの史料を年次順に掲げ、3種の系図もあわせて掲載し、両者を見比べながら考察する必要がある。史料の中に出てくる塩治氏の人名を、必ずしも系図上に見出せないことが、塩治氏の歴史を一層不鮮明にしているので、史料中の名前を系図中のどの人物に比定するかという作業を通して、若干の問題点を引き出してみたい。

（1）後塩治氏関係史料

明徳3年（1392）

塩治驥河守、山名満幸の代官として富田城に居たが、明徳の乱で山名氏が敗れ、京極高詮が出雲守護職に選補されるや、守護代忍岐五郎衛門尉が入部し、

（出典）

明 徳 記

ために駿河守は自刃し、父上郷入道は京極方に降った。	
明徳4年2月5日(1393)	
山名満幸並びに塙治遠江入道父子、三刀屋城攻撃。諏訪部菊松丸これを撃退す。諸家文書纂三⑭	
応永19年12月26日(1412)	
幕府、塙治駿河小次郎詮清に塙治郷内の園村・柄島などの地を安堵する。	波根文書⑯
永享年間(1429~40)	
将軍御番衆のうち第二番衆に、塙治三河守、塙治四郎左衛門尉あり。	⑯ 永享以来御番帳
永享3年9月22日(1431)	
幕府、佐々木塙治五郎左衛門尉にあてて、朝山郷・米海庄年貢進済の夫賛が一換によって加増されているのを、元に復するよう命ずる。	室町家御内書案下 ⑰
永享9年10月21日(1437)	
後花園天皇、将軍義持邸参内にさいし、佐々木塙治五郎左衛門尉光清は布衣侍として奉迎する。	永享9年行幸記⑮
文安年中(1444~46)	
公方御番衆五番のうち第3番に塙治五郎、詮衆のうちに塙治四郎左衛門あり。文安年中御番帳⑯	
宝徳元年8月28日(1449)	
将軍義政御参内始の行列に、佐々木塙治參河守衛府侍として隨從する。	康富記
宝徳2年1月17日(1450)	
武家御的始にあたり塙治又四郎二番射手となる。	康富記
康正2年(1456)	
塙治參河守、造内裏段錢として5月30日に10貫文、6月21日に20貫文を出す。	康正2年造内裏段錢並国役引付 ⑳
長禄2年3月9日(1458)	
塙治光清、塙治八幡宮に畠を寄進。	富家文書⑯
寛正3年8月28日(1462)	
塙治豊高、塙治郷内の三崎(御崎)御神田を日御崎検校に安堵。	日御崎神社文書㉑
寛正6年8月11日(1465)	
将軍義政善法寺御成にさいし、佐々木塙治五郎左衛門尉秀清は衛府侍として隨從。9月29日還御にあたり、布衣侍衆のなかに佐々木塙治五郎あり。	斎藤親基日記㉒
文明4年3月20日(1472)	
幕府、日御崎社と杵築大社の境争論に対し裁定を下し、日御崎検校小野政繼に合力するよう佐々木塙治五郎左衛門尉に命ずる。	日御崎神社文書

文明5年12月13日(1473)	
塙治宮内少輔貞綱、大津村一段を塙治八幡宮に寄進。	富家文書◎
文明7年12月14日(1475)	親元日記別録◎
塙治政通、多賀清忠が質地出雲赤江庄を返付しないことを幕府に訴える。	
文明9年1月15日(1477)	日御崎神社文書◎
源貞綱、神東村のうち5段の地を日御崎社に寄進。	
文明10年1月7日(1478)	越川親元日記◎
塙治宮内少輔貞綱、伊勢貞宗父子に太刀・金を贈る。	
文明10年11月21日(1478)	越川親元日記◎
塙治周防守豊綱、伊勢貞宗に調・熱柿・柳樽などを贈る。	
文明18年1月1日	陰徳太平記
尼子經久、富田城を奪取し、守護代塙治掃部助を殺す。	
長享元年1月15日(1487)	富家文書◎
参河守源貞綱、神東村五段について神東八幡宮に再び寄進状を出す。	
長享元年10月13日(1487)	永田家文書◎
参河守源貞綱、高岡八幡宮に神田一段を寄進。	
長享元年9月12日(1487)	長享元年9月12 日常徳院殿様江 州御勤座 当時 在陣衆着到◎
将軍義尚の近江鈎出陣にさいし、奉公衆三番衆として佐々木塙治三河守・佐 々木塙治五郎左衛門尉・佐々木塙治新九郎が随從した。	
明応元年(1492)ごろ	東山殿時代大名
塙治河守、塙治五郎左衛門尉、三番奉公衆を勤仕。	外様附 ◎
明応4年11月13日(1495)	朝山文書◎
幕府御料所出雲朝山郷代官塙治新九郎が年貢を緩怠したので、幕府は彼を改 易し、飯尾加賀守清房を代官に任命したが、新九郎は承引せず、塙治参河守 以下親類のもの、及び国人と語らって御料所に発向せんとした。	
明応5年4月23日(1496)	朝山文書
御料所朝山郷の山境について、杵築大社と争論がおこり、両国造は往古の例 に背いて違乱をするのみか、佐々木塙治・古志た京亮以下の国人を語らって、 朝山郷に押し寄せ合戦となる。	
明応9年4月19日(1500)	朝山文書
御料所朝山郷代官塙治三河守に対し、地下人等意趣ありと号して年貢を緩怠 する。	

永正 4 年 (1507)

大内義興、足利義稙を擁して上洛するにあたり、出雲でも尼子経久以下国人隨從。その中に塩治氏あり。

陰徳太平記

享禄 4 年 4 月 8 日 (1531)

塩治貞慶、塩治郷を去る。

佐々木譜

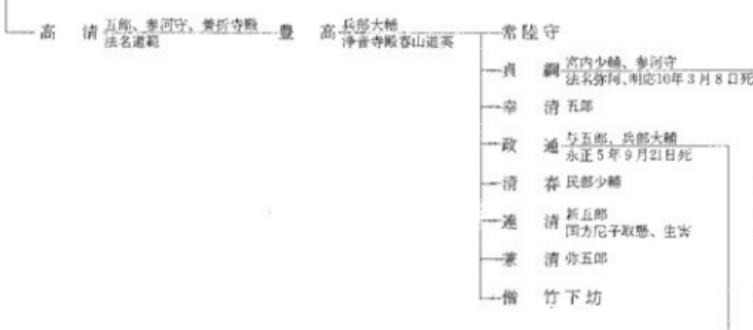
天文 8 年 (1539)

横田岩屋寺仁王堂建立にさいし、尼子詮久(晴久)と塩治兵庫助泰敏が檀那となる。

岩屋寺文書◎

(2) 塩治氏諸系図 (抄出)

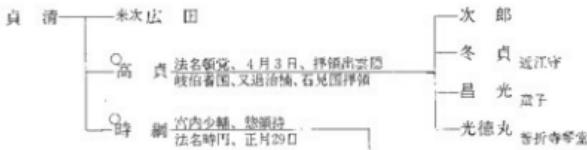
イ. 北島家本 出雲佐々木尊達之系図 (島根県立図書館蔵影写本北島男爵家藏文書其八所取)



—高 家— —秀 弘
 —貞 清 五郎 永正 5 年 12 月 9 日死 ——興 廣 廉 4 年 4 月 9 日 国 久 分尼子刑部
 尼子義子ニ成ル、自此他家へ成リ
 治絶ル
 —又 五 郎
 —僧 見上人
 —虎 千 世 九 補陀洛ヘ渡ル
 —女 国造千家高俊室
 法名花翁妙香

口、覚専寺本 出雲佐々木塙治懇願次第記 (斐川町原鹿 覚専寺藏。写本島根県立図書館蔵)

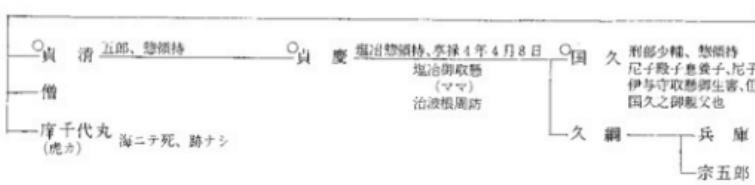
○印は懇願



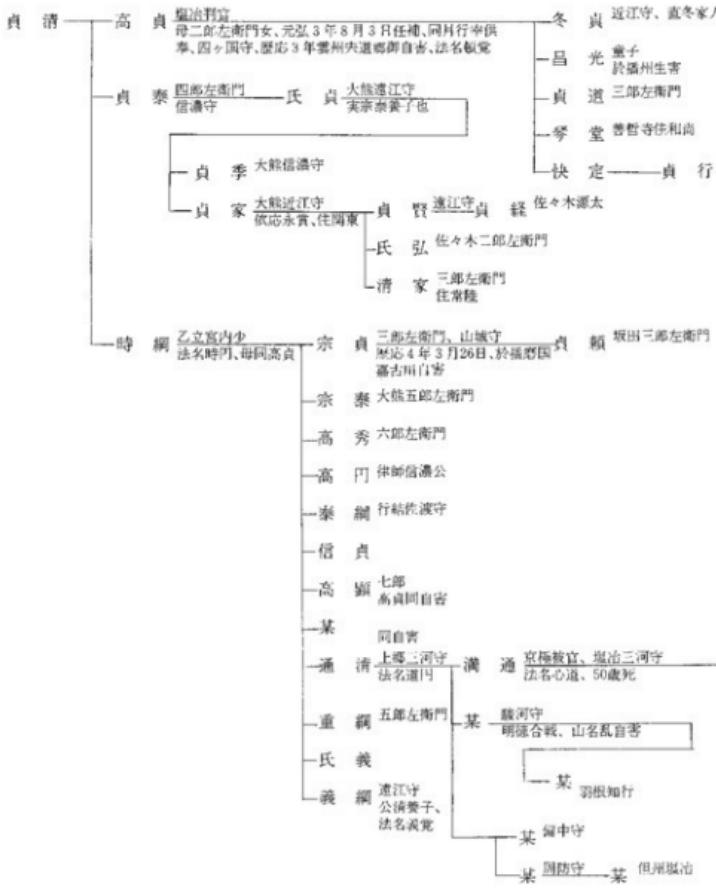
○義 繩 山宮ノ山名殿御持、速江守昇
井定東、慈願持、法名義覚 ○通 清 參河守
法名道円、27死、4月25日

—藤河守 羽根殿出ル
 —儀中守
 —周防守 但馬ヘワカルナリ
 ○満 通 參河守、井定東 ○高 清 五郎、參河守、奔折寺殿 ○豊 高 淨省寺殿、兵部大輔
 慈願持、法名心道、50死

—常 陵
 ○貞 繩 宮内少輔、參河守、慈願持
法名義阿、明応10年四(ママ)3月8日ニ死
 ○幸 清 五郎、慈願持 5月9日 ——高 家 10月10日 ——秀 弘 大藏少輔
 ○政 通 与五郎、兵部大輔、慈願持 永正5戊辰9月21日死 守 清 与五郎、淨 光 座五郎 ——高 忠 兵部少輔
 民部少輔
 ○清 春 尼子殿取慈願而生吉ス 同前五郎
 —兼 清 同前五郎
 竹本坊



八. 続群書類從本 佐々木 譜



高 清	二岡守 芳善寺道範	高 兵部大夫 法名泰山道英	常 陸
一 貞	清	三河守、宮内少輔 明応15年(ママ)3月8日死、法名弥同	
高 家	——	秀 弘 大藏少輔	
一 节	清	五郎	
一 政	通	秀与五郎 後丹波守兵部少輔、出雲國島根郡坪谷村知行、 永正5年9月21日卒	
		義 綱	
一 情	春	民部少輔	
一 速	清	秀五郎 尼子殿生實	
一 僧	鷺洲寺竹本坊		

誠 勝	上郷左衛門	小法師丸
宗 清	湯与五郎	淨 光 彦五郎

泰 敏	美作守 住横田	惟 宗 住邊守	永 綱 湯三郎左衛門助
久 清	兵部助		

高 家	——	秀 弘
貞 清	五郎 永正5年12月9日卒	貞 麟 幸禄4年4月9日 塙清治退出
虎千代	是八入水	
某	又五郎	
女 子	出雲國守後妻	

(3) 二・三の問題

イ 明徳記に現われる上郷入道・駿河守父子について

明徳記によれば、京都内野の合戦に敗れた山名満幸は、山陰道の領國へ帰って態勢をたて直そうとするのであるが、国人層はいずれも彼の下知に応じなくなっていた。出雲の場合、「山名播磨守（満幸）ガ代官塩治ノ駿河守、富田ノ城ニ籠テ討手ノ下向ヲ待懸タル処ニ、國中悉ク京勢ニ馳加ハリ、今ハ城ニハ塩治ノ一族三十余人ノ外ハ無リケル。」という状態で、多くの国人武士は、新たに守護職に補任された京極高誼の派遣せる、守護代豊岡五郎左衛門尉に従つたのである。そのため、駿河守は父上郷入道を駿岐方へ降らせ、自分は城下の城安寺において自刃し、富田城は豊岡五郎左衛門尉の手中に帰した。

この上郷入道は、群従本系譜に「上郷三河守、法名道円」と注記されている通清であることはまずまちがいない。駿河守は通清の子であるが、系譜では名を明らかにしていない。姓氏家系大辞典に「駿高なりと云ふ」としているが、根拠は明らかにされていない。注意すべきは、通清の子息のうち、満通をのぞいた他は悉く「某」とあって名が記されていないことで、これは明徳の乱に与同した人物で、名を記すことを憚ったためではあるまい。

明徳記の諸本いずれも上郷入道としているが、これは上郷入道の誤りで、出雲市上島町の上郷の地名に由来するものである。通清は塩治郷に隣接する（あるいは室町時代には塩治郷内にふくまれていたかも知れないが）上郷の地を領し、上郷城に居住していたため、この地名を称したものと思われる。系図上で上郷を称する者は、通清以前に見当らないので、あるいは彼が上郷城の初代城主ではなかろうか。上郷城は斐伊川左岸に位置し、奥出雲方面から塩治郷への進入路の喉元にあたる拠点である。

諸家文書集所収の勘訪部家文書によると、明徳4年2月5日山名満幸に与同する塩治遠江守父子が、三刀屋城の勘訪部菊松丸を攻撃しているが、遠江守を系図中に求めるとき、北島本では、通清の兄、覚専寺本では通清の父にあたる義綱に比定することができるであろう。

口 奉 公 衆

明徳の乱当时、山名氏の配下として出雲守護代的地位にあった塩治氏は、山名氏の敗北によつて大きな危機を迎えたはずであるが、その後もかなりの勢力を保ち得たのは參河守満通によると考えられる。満通は明徳の乱に自刃した駿河守の兄（又は弟）である。群従本系譜に「京極氏被官」と注記されているように、彼は駿河守とちがって、いち早く京極方の被官となったのである。そのことが塩治氏の危機を救うのみか、やがて塩治氏が将軍の奉公衆として將軍直属の家臣團に編入される引き金となつたのである。

◎

室町将軍家の奉公衆は、佐々木系が圧倒的に多かったといわれるが、そのうち大部分は、京極氏の属する信綱流で、塩治氏だけが例外的で義清流であった。満通がどのような経緯で奉公衆に

なったかは判らないが、守護京極氏の強い推輓があったにちがいない。京極氏にとっては、出雲国人の中で御家人の系譜をひく名族塩治氏に対し、同族意識以上の感覚があったのかもしれないが、反面、守護に接近しようとする溝通の努力も見逃がすることはできないだろう。

塩治氏が奉公衆として名を現わすのは、永亨以来御番帳の塩治三河守、塩治四郎左衛門尉が初見であるが、彼らを系図上に比定するとなると溝通があるいはその子高清であろう。二人ともいすれも答河守である。

永享9年行幸記に佐々木五郎左衛門尉光清の名が見える。系図には光清は見えないが、高清の名が見える。当時は主君の偏諱を頂くのを例としたから、光清が守護京極持高あたりの「高」字をもらって高清と改めたことも考えられる。

塩治氏が奉公衆として将軍に勤仕した時期の下限は明らかではないが、少なくとも明応10年（文亀元年＝1501）ごろ没したと思われる貞綱までは明確に奉公衆であった。貞綱の前半は、在地性を保つつも奉公衆としての地位の保全に努めたようである。大津村の地を塩治八幡宮に寄進したり、神東村五段を日御崎神社に寄進する一方で、幕府奉行人伊勢貞宗に金品を献じたりしているのは、その具体的あらわれであろう。

その塩治氏も明応4年（1495）ごろには、幕府御料所朝山郷代官塩治新九郎が年貢を緩怠し、改易されると、塩治參河守以下親類、その他の国人を語らって御料所に発向しようとした。つまり公然と幕府に反抗する姿勢を示すようになるのである。恐らくこの時点で、塩治氏の方向が大きく変化したといえよう。幕府将軍権力がまがりなりにも現実的力をもち得た時期には、奉公衆としてこれに直結することは国人領主にとってきわめて有利であった。しかし応仁の乱以後、急速に崩壊する幕府権力と直結することは、もはや無意味であり、むしろ周辺の国人層との連携の中で、より鞆団な在地支配を試みる必要があった。塩治氏の方向転換はまさにそのような情況に対応したものであったろう。

文明10年（1478）父清定に代わって守護代職を継いだ尼子経久は、社寺領を押領し、禁裏殿銭その他の公役を緩怠するなど、公然と守護京極氏と対立した。これに対し幕府は、文明16年3月経久追伐の命を国人に下したが、三沢・三刀屋・朝山・広田・桜井・塩治・吉志など、意外に多くの国人が幕命に応じ、守護京極政経の催促に応じたので、経久は守護代職を剥奪され、^⑩富田城を追放された。雲陽軍実記、陰徳太平記などの軍事記によれば、代わって塩治掃部介が守護代となつたが、経久は、文明18年元旦、奇計をもって富田城を奪取し、塩治掃部介を自刃せしめたという。この掃部介もまた系図上に見出すことはできない。ただし、貞綱の弟連清の注記に、「尼子殿取懸候而生密ス」（「覺専寺本」）とあるところを見ると、あるいは掃部介は連清ではなかったかと思われる。ただし掃部介が自害した後も、貞綱は塩治卿を領知していた。

ハ 塩治惣領家の断絶について

上記三種の系図の語るところによると、惣領貞慶（北島本では興慶）は享禄4年（1531）4月8日（群従本では9日）塩治郷を退去している。覚専寺本の貞慶注記に「塩治御取懸」と書かれているのを見れば、「退去」とは尼子経久又はそれに頼する外部勢力によって追放されたことを意味すると思われるが、詳しいことは不明である。

貞慶の後を継いだのは、どの系図も国久としている。群従本では国久に「尼子殿子他、繼塩治」と注記し、覚専寺本は「尼子殿子息養子、尼子伊与守取懸御生害、但国久之御親父也」と記している。これらの注記によれば、国久ちは尼子経久の二男国久のことである。然し国久は天文23年（1554）尼子晴久によって暗殺されるまで、新宮党の領袖として尼子軍事力の一翼を担って活躍した人物であり、塩治氏の養子になっていた事実も、父経久によって殺された事実もない。諸系図は天文元年（1532）の塩治興久の乱と混合しているように思われる。

興久は経久の三男、つまり国久の弟である。雲陽軍事記などの軍事物によれば、彼は三千貫を与えられて塩治城に居たが、原手郡の加増を願って容れられないと、怒って父に叛旗をひらかえて敗れ、天文3年備後で自殺したといわれる。貞慶の養子となつたのは国久ではなく興久であったと思われる。系図が何故国久としたのか明らかでないが、国久が貞慶の後継者となつた可能性は極めてうすい。

興久は永正15年（1518）塩治彦四郎興久の署名をもって、塩治郷高岡村内の地1町を神田として口御碕神社に寄進している。[㊯] とすれば、興久はすでに永正15年22歳のときには塩治氏を称し、塩治郷内の地を自由に進止しているから、少なくともこの時点では貞慶の養子に入っていた可能性は十分ある。貞慶が享禄4年塩治郷を退去したのは、恐らく尼子経久と興久による策謀の結果と思われ、毛利元就が元春を養子に入れて掌中にしたのと同じケースをそこに見ることができる。かくして尼子経久は出雲西郷最強の豪族を手中にすることにできたが、経久の国内征服過程の一断面をうかがえて興味深い。

貞慶を排除して強豪塩治氏を手中にした経久も、その翌年天文元年興久の叛乱にあって止むなくこれを追伐せざるを得なくなり、結果的に塩治氏を滅亡させることになった。

以上、断片的考察に終わったが守護京極氏と被官関係をもちつつも、将軍直属の奉公衆として在地性を保ちながら在京して將軍に勤仕した特異な存在型態の塩治氏について紹介し、今後の研究の問題提起をしたい。

註

- ① 出雲国風土記参究
- ② 島根県史第7巻（復刻版6巻）92ページ
- ③ 千家文書（『鎌倉遺文』第14巻10922号）
- ④ 佐藤進一「^増_訂鎌倉時代守護制度の研究」、井上寛司「隱岐國守護職考」（『島前の文化』10号）
- ⑤ 佐藤氏前掲書
- ⑥ 井上氏前掲論文
- ⑦ 群從木佐々木家譜では、弘安10年死去としているが、曾根研三氏は鶴渕守文書佐々木頼泰書状によって弘安5年と訂正される。
- ⑧ 千家文書（『新修島根縣史』史料篇1）この文書は無年号で発給者は沙弥とだけあるが、井上氏は内容から弘安元年のものとし、また花押からこれが泰清のものであることを証された。
- ⑨ 前掲④参照
- ⑩ 千家文書は佐々木頼泰田地寄進状（『鎌倉遺文』第17巻13166号）
- ⑪ 「出雲私史」、『島根縣史』第6巻などでは、自明のこととして書いている。
- ⑫ 「山陰一地域の歴史的性格」（雄山閣刊）に全文収録されている。
- ⑬ 前掲⑧文書
- ⑭ 『大日本史料』7-1
- ⑮ 『新修島根縣史』史料篇1
- ⑯ 『群書類從』29 雜部
- ⑰ 『改定史籍集覽』27
- ⑱ 後鑑（『続国史大系』第7巻
- ⑲ 前掲⑩
- ⑳ 『群書類從』23 武家部
- ㉑ 『塙治旧記』所収
- ㉒ 前掲⑩
- ㉓ 『群書類從』23 武家部
- ㉔ 『大日本史料』8-7
- ㉕ 『大日本史料』8-8
- ㉖ この文書の発給人「源貞綱」を『大日本史料』8-9並びに『新修島根縣史』史料篇1では、三沢貞綱としているが、塙治郷内の土地に関する同時代の他の寄進状から考えて、塙治貞綱とすべきではあるまいか。
- ㉗ 『大日本史料』8-11
- ㉘ 『塙治旧記』所収
- ㉙ 前掲⑩
- ㉚ 『群書類從』29 雜部
- ㉛ 今谷明「東山殿時代大名外様附について」（『史林』63-6）
- ㉜ 前掲⑩
- ㉝ 前掲⑩
- ㉞ 福田豊彦、佐藤堅一「室町幕府将軍権力に関する一考察（上）」（『日本歴史』228号）
- ㉟ 米原正義「風雲の月山城」82ページ以下
- ㉟ 日御碕神社文書 塙治與久田地寄進状（『新修島根縣史』史料篇1）

島根医科大学解剖学講座

中村和成

1) 人骨はすでに収集された後に、我方で調査したため葬法（遺体が伸展位か、屈曲位か、仰臥位か否か）は不明。

2 出土人骨のうち部位（骨名）が判明したものは次の通りである。

1. 頭蓋骨（頭蓋冠、頭蓋底は連結）
2. 左右の下顎骨
3. 大腿骨々片 4
4. 上腕骨 1（左右不明）
5. 鏈骨（部分）
6. 肋骨（頭・頸部） 1
7. 横骨（又は尺骨）（部分） 2
8. 寛骨の骨片と推定されるもの 4
9. その他判別不明の骨片約 30



3 頭蓋冠は比較的原形をとどめており、頭蓋冠の右頭頂骨に陥凹骨打後化骨が進んだと思われる像が認められた。左眼窩下方および右側頭部を中心とする欠損は腐敗によるもので外傷とは関係ないと考える。上顎骨の歯列弓はほぼ完全に近く保存されており、下顎骨も右下顎骨は下顎枝を除きほぼ完全に、左下顎骨は下顎体前部が分離して 2 つになっているが下顎枝がほぼ完全に保存されていた。歯は切歯、犬歯、小・大臼歯共変化が少なく、大臼歯はいづれの歯溝も咬合面の磨耗が比較的少ない。頭蓋骨の保存状態に比して、四肢は腐敗がはげしく完全な大腿骨はえられず、また肢骨も発見できなかった。

4 年令は成人（20～40才が推定）。性は男と推定する。なお、上・下肢骨の保存悪いため身長の推定算出は不可能であった。

赤色顔料について※※

須恵器に収納されていた赤色顔料は、分析の結果、純粋な Fe 含有量は 0.3 mg を測定した。収納されていたのは砂分 SiO₂ が主たるもので、砂粒に付着する程度のものであり、Fe 化合物としては 30～40 % と考えられる。通常ベンガラ（Fe 赤色顔料）とは 70～80 % であり、自然鉱石内の割合が 30 % 前後のものが多いことからすれば、本資料は人工的な顔料ではないとも考えられる。

* この所見については出雲市教育委員会に提出されたものを鑑定者と出雲市教育委員会の承認を得て掲載させていただいた。
※※ 赤色顔料の分析については田部駿氏の御協力を得た。

まとめにかえて

建設省出雲工事事務所から委託をうけて出雲・上塩冶地域を中心とする遺跡調査を実施し、その概要を報告したところであるが、この地域の遺跡実態については調査前に比べて、より明確に把握できた面も多かったと思われる。

出雲地方の歴史はよく出雲市を中心とする西部と松江市を中心とする東部が対比され、それれに大きな勢力が存在したと考えられ、歴史的にも興味ある問題を提起している。しかし、今度の調査は個々の遺跡の内容報告を主眼としたため、学術的には今後に残した問題点も多い。

以下、上塩冶地域の遺跡群のもつ特徴や問題点について簡単に触れてみたい。

弥生、古墳の古い時代と中世等の新しい時代の集落跡とは出雲平野の中央を貫流する斐伊川と神戸川の2大河川によって、形成された自然堤防上に立地するものが大部分であるが、平野の南北に横たわる丘陵縁辺にも小規模なものが散在している。一方、古墳、横穴等は低丘陵上やその麓近くに立地している。例えば、西谷墳墓群、大念寺古墳、上塩冶築山古墳、地蔵山古墳、放れ山古墳、上塩冶横穴群などはそうである。また、中世の城跡も平野の要地に位置する丘陵上の高处に営まれている。

これらの地域は島根県下にあっては松江市南郊の県立八雲立つ風土記の丘などとともに有数の遺跡集中地区である。特に、古墳時代後期の巨石墳として知られる大念寺古墳、上塩冶築山古墳は県下の同種の古墳のなかでも白眉であり、刈山古墳群、上塩冶横穴群等はその群構成や規模において高い学術的価値をもっている。また、古代の出雲西部の有力豪族である神門臣、日置部臣、刑部臣などの舞台としても、『出雲国風土記』に記載された朝山郷、古志郷の両新造院や神門郡家、狹結駅等の置かれた場所としても注目される。さらに、時代は下って中世においては出雲守護職塩治氏の居館が塩治郷に存在し、出雲国の中心地となっていた。また、後醍醐天皇を輔けて上落し、建武の新政に参画した塩治判官高貞の活躍時期以降には平野の各地に多くの城砦が築かれ、現在でも良好にその遺構が残っている。

しかし、多数の遺跡が集中しているにもかかわらず、発掘調査によって範囲を確認したり、個々の遺跡の実態が判明しているものは少ない。加えて、出土遺物も各所に散在して保管されているのが実情である。

さらに、今回調査の対象とした地域は区画整理事業、島根医科大学関連施設建設事業、住宅団地造成等の事業により、農村部から市街地へと変貌しつつあり、おそらくは10年後ともなると現在の面影は相当薄れると思われる。このような状況下において文化財保護についても適切な措置を講ずる必要にせまられている。

以下、いくつかの点を提言し、各方面の方々の暖かい理解と協力をお願いしたい。

- ①今後より密度の高い遺跡分布調査を行なうとともに、矢野遺跡、天神遺跡、神門寺境内廃寺、神門郡家推定地、塙治氏館跡等の重要遺跡の範囲確認調査を実施し、遺跡の保存、活用に努める。
- ②都市公園構想（例えば「市民の森」構想の一環）のなかに平野縁辺丘陵地や山麓にある上塙治築山古墳、半分古墳、地蔵山古墳、西谷堆墓群、上塙治横穴群、刈山古墳群、塙治氏関係城館跡群等の著名かつ重要な遺跡を含め、将来的に保護する。
- ③地方中核都市にふさわしい文化施設としての考古館あるいは歴史資料館等を建設する。この施設にはこの地域の出土品等を陳列し、文化財に対する正しい認識と郷土の歴史の理解に寄与させる。

あとがき

出雲・上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査は、建設省出雲工事事務所から受託した時点では試掘調査を中心とする予定であったが、調査体制や土地交渉等の問題により周辺地域の踏査や古墳、城跡の実測・測量が主な内容とならざるを得なかった。

その中で、特に中世城跡の実測は県下においても他に実例がなく、塙治氏をはじめとする中世土豪の勢力と、その城跡の規模・内容との関係を知る上で有意義な作業であったと考えられる。また、出雲平野の考古学史は今後の調査研究の指針となり、中世土豪の動向等は新たな地域史の出発点となると信ずる。

なお、本書は執筆者が多数であり、内容も多岐に亘っているため、用語、図面等に統一性を欠く点が多く認められることをお詫びする。

最後に、公私とも多忙中、調査、執筆戴いた調査員の方々に心からお礼申し上げるとともに、本書がこの地域の文化財保護及び歴史教育に少なからず役立てて望外の喜びとするところである。

（編集者）

図 版

図版 I (縄文時代)

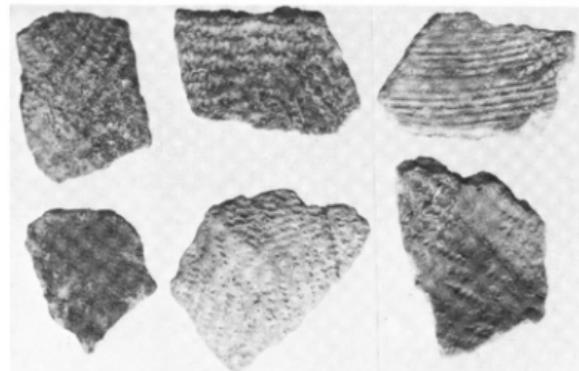
菱根遺跡近景
(南から)



三反谷遺跡近景
(東から)



菱根遺跡出土土器





▲ 1975年天神遺跡の遺構（東から）

天神遺跡出土の壺棺 ▶



図版3 (弥生時代)

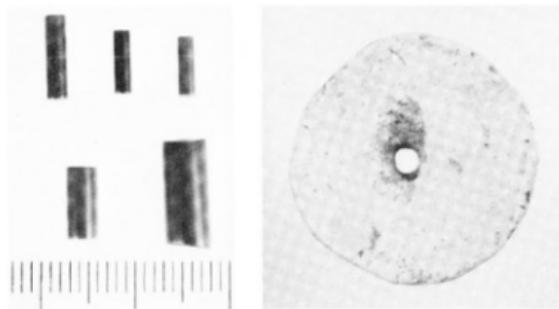
矢野遺跡遠景
(西から)



土壙内出土の変形土器



管玉と紡錘車

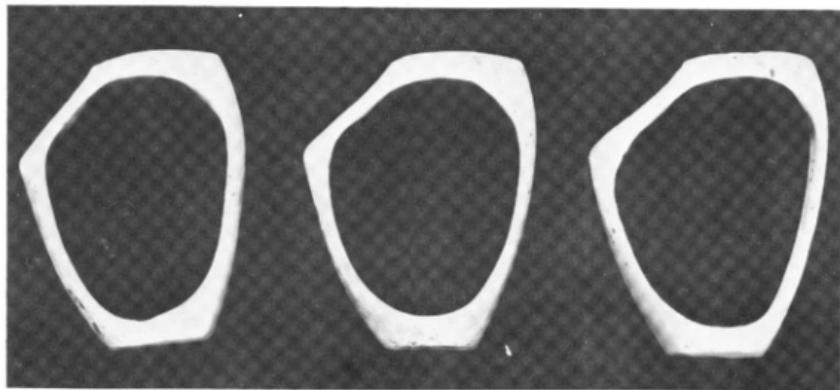




命主神社境内出土の銅戈



原山遺跡出土の石劍

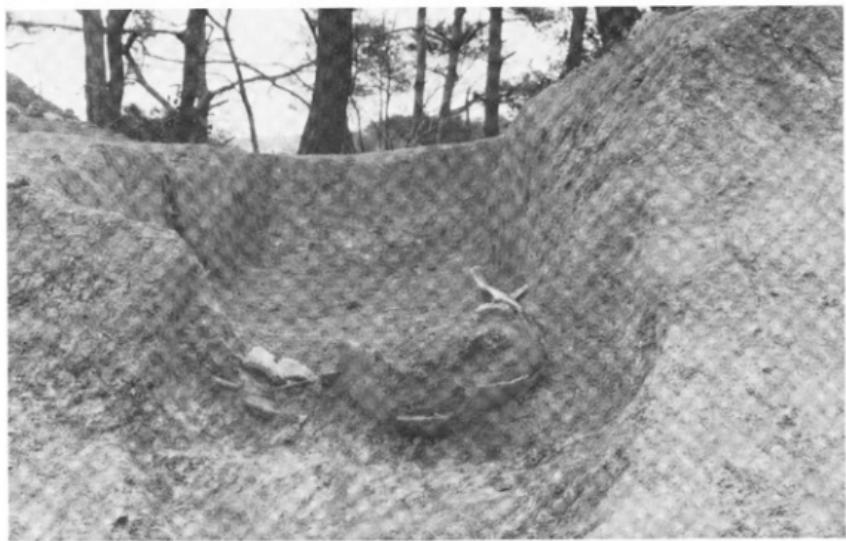


猪目洞窟出土の貝輪

図版 5 (弥生時代・古墳時代)



西谷 1 号墓



西谷番外 1 号墓 (土塚墓)



大念寺古墳遠景（南から）



大念寺古墳石室内部

図版 7 (古墳時代)

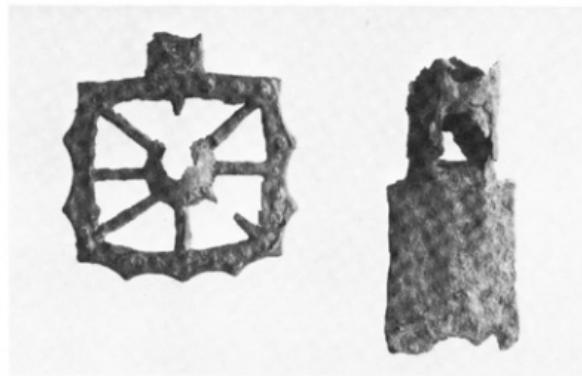
大念寺古墳
(玄室櫛石付近)



(石棺内部)

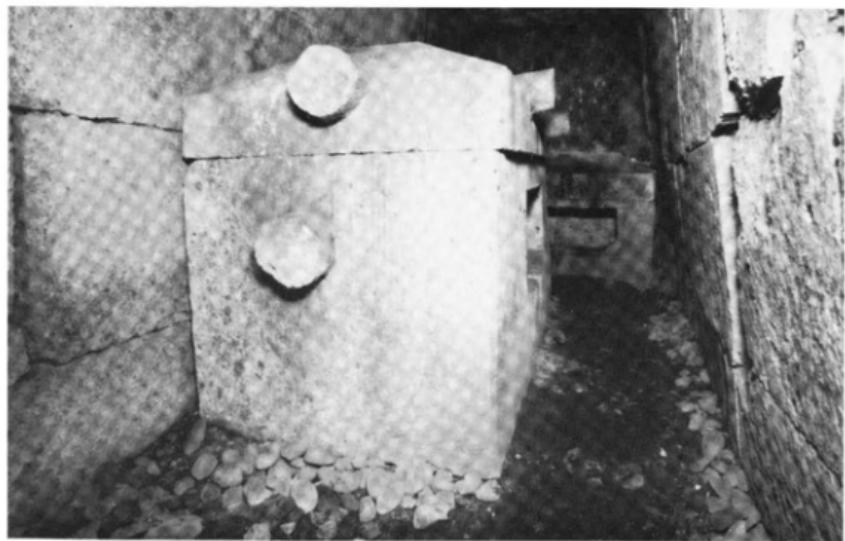


(出土品：鏡板と斧)



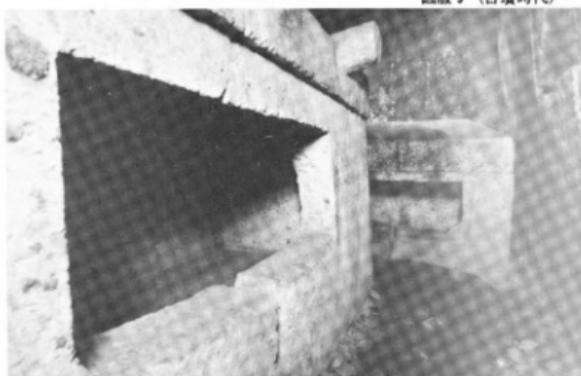


上 塩冶築山古墳近景(南から)



上 塩冶築山古墳石室内部(玄室)

上塙治篠山古墳
(家形石棺)



(玄室西壁の一部)

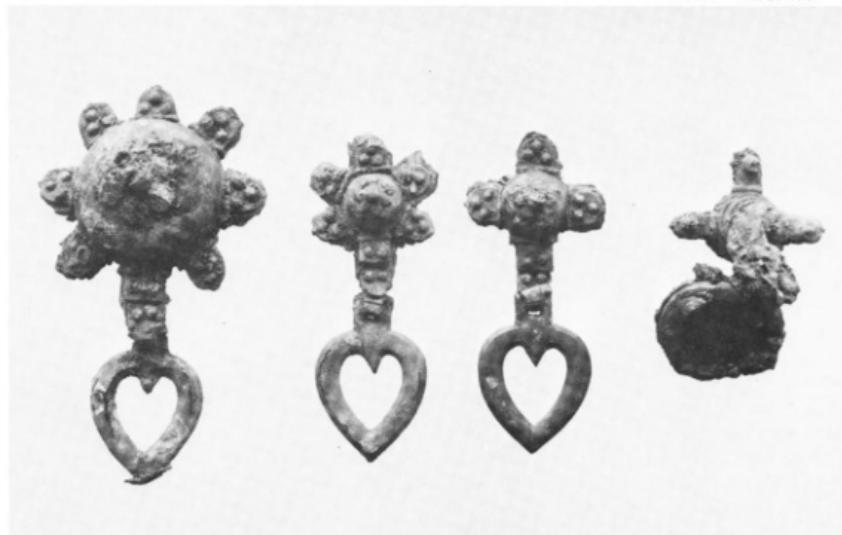


(羨道部)





上 塩冶築山古墳出土の玉類・耳環・金銅冠・大刀



上 塩冶葉山古墳出土の馬具



地蔵山古墳近景



地蔵山古墳石室内部 (美道から)

図版13 (古墳時代)



小坂古墳近景



小坂古墳石室内部（中央は石様）

図版14 (古墳時代)

塚山古墳石室内部 ▶



▼ 大槻古墳石室内部



図版 15 (古墳時代)



放れ山古墳近景

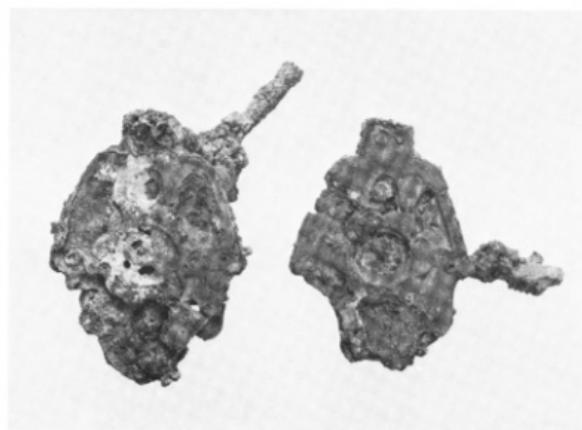


放れ山古墳石室内部



▲ 放れ山古墳出土の大刀

馬具（鍊板）▶



土器（須恵器）▶





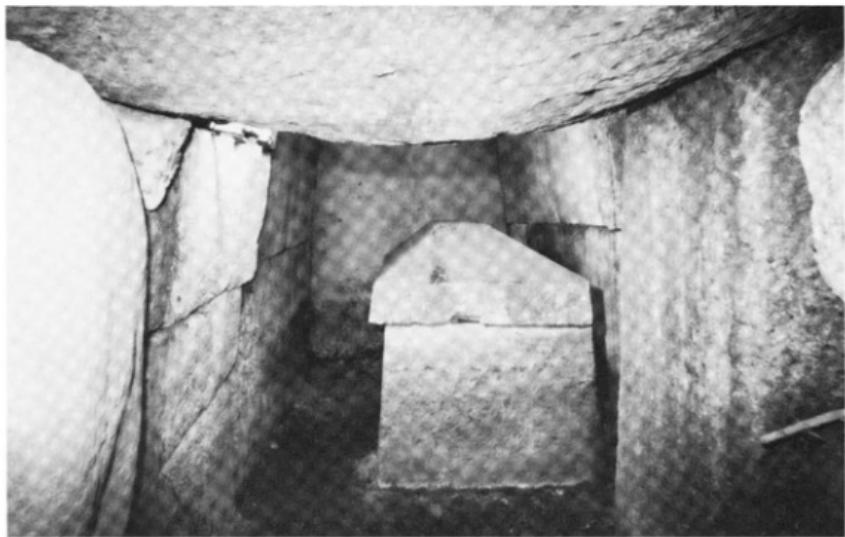
妙蓮寺山古墳石室内部



妙蓮寺山古墳石室内部（玄門施設）



宝塚古墳近景（南から）



宝塚古墳石室内部

図版19 (古墳時代)

上塙治横穴群遠景
(出雲工業高校付近)
西から



(大井谷付近)
北から



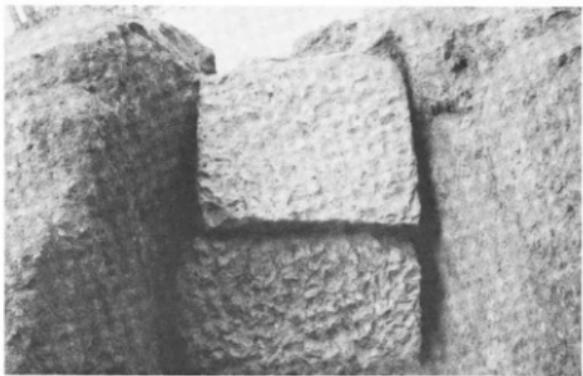
(三反谷付近)
西から



上塙治横穴群
27 支群全景



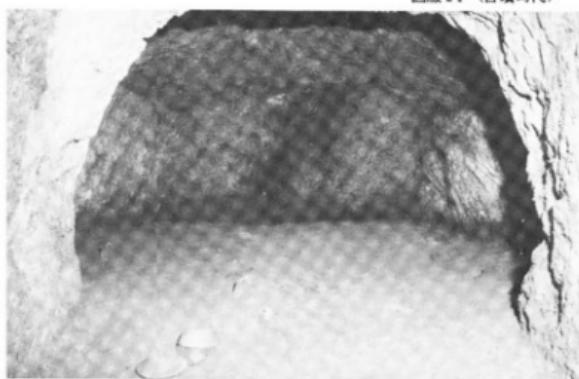
27 支群 I 号穴の閉塞状況



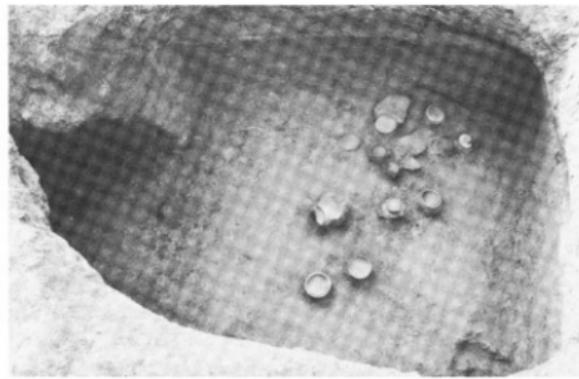
22 支群 8 号穴の閉塞石



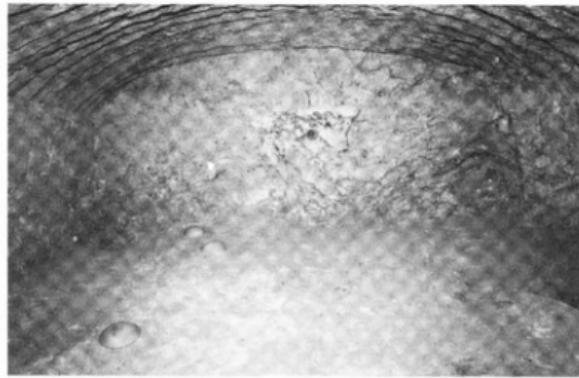
上塙治横穴群
22 支群 1 号穴玄室内



27 支群 1 号穴玄室内



27 支群 2 号穴玄室内

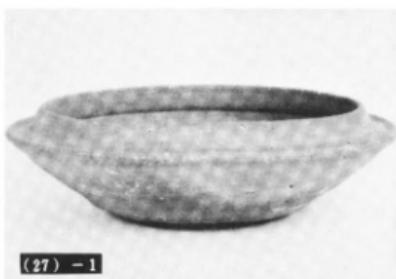




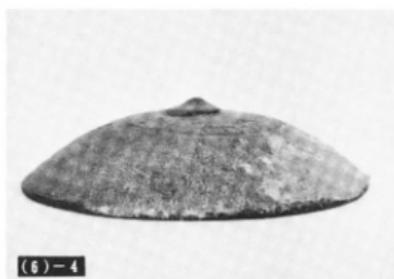
(4)



(27)-1



(27)-1



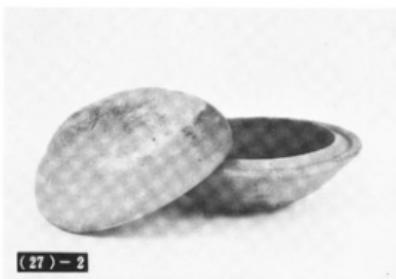
(6)-1



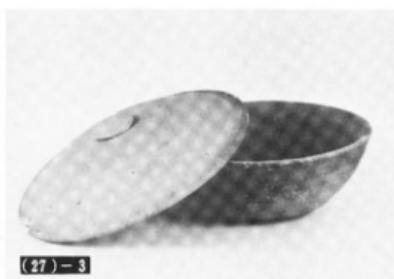
(27)-1



(6)-1



(27)-2



(27)-3

上 塩冶横穴群出土遺物 ()は支群名を表わす



上 塩冶横穴群出土遺物



1975年 天神遺跡調査状況（南から）



西西郷廣寺跡（南から）



天神遺跡出土墨書き土器（「旱天」）



天神遺跡縁付陶器



(上) 神門寺境内廃寺出土瓦
(下) " 磚石



鷲羽寺藏王辰銘金銅仏

平田市大船山遠景
(中央は多久神社)



菅沢古墓



長者原廃寺の現状





平家丸城跡（西から・出雲市立図書館提供）



向山城跡（南から）



大井谷城跡 (西から)



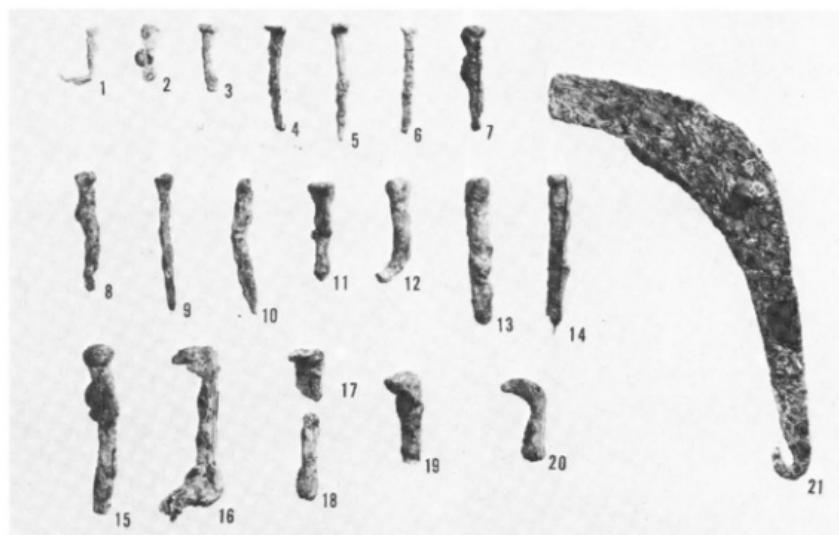
半分城跡 (西から)



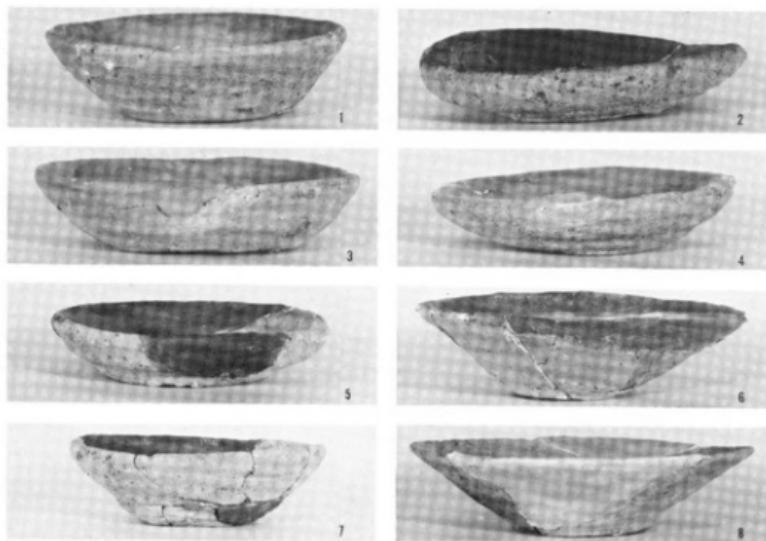
大井谷城跡西一郭の遺構



半分城跡西一郭の遺構



半分城跡西一郭出土の鉄器



半分城跡西一郭出土の土師質土器



唐墨城跡（朝山集落から）



唐墨城跡（中腹から戸倉城を望む）



姉山城跡（北西から）



姉山城跡（東から）



淨土寺山城跡（北から、左は妙蓮寺）



栗栖城跡（北から）



神西城跡（北から）



高城跡（東から）



萬ヶ里城跡（南から）



萬ヶ里城跡（東から）



戸倉城跡 (東から、右は大袋山)



上之郷城跡 (北から)



伝塙治判官館



伝三木氏館(北から)



大坊



伝塙治高貞五輪塔 (神門寺)



伝吉祥姫五輪塔 (大坊)